様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究 B
研究期間：2006～2008
課題番号：18720020
研究課題名（和文）　中井正一の政治思想――「委員会の論理」と民主主義実践の可能性を中心に
研究課題名（英文）　Political Thought of Nakai Masakazu

研究代表者：葛西弘隆（KASAI HIROTAKA）
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：70328037

研究成果の概要：
戦時期日本の思想家であり多面的なキャリアをもつ中井正一の思想を一貫した民主主義実践として捉え、1936 年の「委員会の論理」に代表されるアカデミックな理論的活動と、雑誌刊行をはじめとするジャーナリスティックな社会実践の両者を、「人々の声」をとおして「政治的なもの」が社会において言語化される民主主義政治の試みとして評価した。そして集団的主体性の構築を理論化する中井の政治思想が、現代政治理論におけるラディカル・デモクラシー論につながるものであることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	270,000	3,270,000

研究分野：政治思想史
科研費の分科・細目：文学　哲学　思想史
キーワード：民主主義

１．研究開始当初の背景

1980 年代までの中井正一論は、戦時期のファシズムに抵抗する文化運動の文脈で評価する研究もしくは評伝的な著作が多い。1990 年代以後は、メディア／視覚文化論、カルチュラル・スタディーズの視点からの議論が提出されている。ただし、政治思想としてその全体像を論じるもの、さらには現代民主主義論との連関を主題とする著作は、管見のかぎりみあたらない。

そこで本研究では、これまで主として関連諸分野で個別に論じられることの多かった中井正一の思想を、政治思想、とくにラディカル・デモクラシー論の視座から探究することを課題とした。

２．研究の目的

本研究は、日本思想史学と現代政治理論の双方に寄与する思想史的、理論的成果を提出することを目標とした。とりわけ下記の諸点を意識している。

（1）これまで主として美学ならびにメディア論としての面から論じられることの多かった中井正一の思想を、政治思想、とくに民主主義論として探究する。

（2）従来、戦時期については反ファシズムの抵抗運動、戦後においては「戦後民主主義」の文脈で別々に評価されてきた中井の思想を、統一的な視座のもとで評価する。

（3）中井の民主主義論を、現代政治理論における「ラディカル・デモクラシー論」の理論的文脈において評価する。以上の特徴から、本研究における中井正一論は、日本思想史学と現代政治理論の双方に寄与する思想史的、理論的成果を提出する。

３．研究の方法

主として以下の三つの視点からアプローチすることをめざした。

（1）「委員会の論理」や「メディウム」と「ミッテル」という二つの媒介概念を中心とする中井の認識論的テクストを、戦時期から戦後にかけての民主主義的主体性の探究として一貫した視座から評価する。

（2）1930 年代に彼が携わった雑誌（『美・批評』、『世界文化』、『土曜日』）での活動とその分析について、理論的業績と社会実践との連関を意識しながら思想史的な評価をあたえる。

（3）上述の時期の反ファシズム運動ならびに理論における民主主義構想と、戦後の社会活動における民主主義実践との連関から、戦時期と戦後の政治思想の連続性を明らかにし、戦後民主主義思想への中井の思想的参与とその特徴を、現代民主主義論、とくに近年の「ラディカル・デモクラシー論」の文脈から再評価する。

４．研究成果

各年度の成果は以下のとおりである。

（1）2006 年度

2006 年度は、主として次の課題に取り組んだ。第一は、中井正一に関する基礎資料の収集と分析であり、第二は、方法論的な関心からの民主主義研究の一環として、現代民主主義論についての探究を進めることであった。

第一の課題については、中井の主要著作の検討を進めている。また、中井にかんする一次資料のほかに、関連する問題として研究代表者が関心を寄せている戦後日本の民主主義思想についての資料についても、有意義なテクスト収集を進めることができ、次年度への準備が進んでいる。第二の課題については、現代のラディカル・デモクラシー論の代表的な論者の一人である、シャンタル・ムフの近年の著作の翻訳に取り組み、2006 年 7 月に刊行された（シャンタル・ムフ『民主主義の逆説』以文社、2006 年)。同書には、研究代表者の民主主義についての検討の一部として、論考「解題---ラディカル・デモクラシー論の現在」を寄せている。

また、2007 年 1 月には、ポーランドのワルシャワ大学中国日本学科とヤギェヴォ大学文献学部日本学科において研究発表の機会をえて、講演「グローバル化のなかの日本社会と文化---現代政治社会を歴史化するために」とディスカッションをおこなった。思想史およびラディカル・デモクラシー論の視点から、現代日本政治社会の問題点、ヨーロッパ地域との共通性、そして今日の社会科学の課題について、ポーランドの日本研究者と議論することができた。

（2）2007 年度

2007 年度は、前年度の成果をふまえて、主として次の課題に取り組んだ。第一は、中井正一の「委員会の論理」と、彼が中心となって活動した雑誌『土曜日』の連関についての分析であり、第二は、中井正一の議論をふまえたうえでの、現代民主主義論についての研究である。　第一の課題については、中井の主要著作の分析を進めると同時に、2008 年 3 月にスウェーデンの国立国際関係研究所で行われた Nordic Association for the Study of Japanese Studies 第 5 回会議に参加し、この間の成果を Democracy and Knowledge:Masakazu Nakai’s “Logic of Practice”として報告した。 中井正一のテクスト読解を手がかりとして、戦時期思想史と現代社会論を接続させる問題設定の可能性について有意義な討議とコメントを得ることができたことは、2008 年度の研究に向けて大きな収穫であった。

第二の課題については、前年度に研究代表者が翻訳刊行したシャンタル・ムフの『民主主義の逆説』をふまえつつ、現代ラディカル・デモクラシー論の理論的射程について、「ラディカル・デモクラシーと『政治』の複数性」を雑誌に寄稿した。

また、戦時期思想史にかんする新たな国際共同研究プロジェクトの企画にむけて、日本、アメリカ、ドイツの研究者と準備を始めた。研究代表者は中井正一の民主主義的読解を中心に参画することとなった。

（３）2008 年度

2008 年度には、主として次の課題に取り組んだ。第一は戦時期日本の思想における中井正一の位置づけについての分析であり、第二は雑誌『土曜日』と戦後日本の民主主義思想との連関についての探究である。双方の論点について、国際的な学会で報告ならびに討議する機会を得ることができた。

第一の課題については、中井正一が「委員会の論理」を提示し、雑誌『土曜日』のプロジェクトに関わった 1936 年前後、すなわち日中戦争前夜の知識人の戦時動員体制の状況との連関に注目し、ファシズムにたいする中井の理論的かつ実践的抵抗運動が、同時代の帝国日本の技術思想／政策の国際的な環境とどのように連関するかについての検討を進めた。この課題については、2008 年 4 月のアメリカアジア学会(AAS)におけるパネル“Migrating Sciences and Technologies of Power in Imperial Japan”に参加し、ディスカッサントとして日独国際関係思想史、日本の植民地支配における技術思想との関連で問題提起を行った。このプロジェクトはアトランタでの会議以後も研究会を開催し、長期的なプロジェクトへの企画を準備しつつある。

第二の課題については、雑誌の内容に読者が積極的に参加するリーダーシップの構築を通じて民主主義的な主体性を構築しようとした、『土曜日』における民主主義実践の試みが、戦後においては、花森安治が中心となって 1948 年に創刊された雑誌『暮しの手帖』のなかにかたちを変えて引き継がれていることを明らかにし、その両者の連関について、2009 年 3 月の北欧現代日本研究会(NAJS)において、“On Hanamori Yasuji and Kurashi no Techo”として発表した。

（４）今後の展望

今後の課題としては、3 年間にわたるプロジェクトをとおして得られた知見をまとめ、出版することが課題となる。すでに行った学会や研究会などでの報告原稿をもとに、まずは数本の論文として発表したうえで、近い将来に研究書としてまとめることを目標とする。

また、研究内容の面では、戦時期の技術思想の国際連関について、新たな国際共同研究プロジェクトの計画が具体化しつつあり、それをとおして戦時期と戦後の連続性を視野に入れた国際政治思想史の文脈に、中井正一の民主主義思想を位置づけることを目指すことになる。こうした研究の理論的可能性とそれを可能にする研究ネットワークの構築の準備ができたことは、本研究に着手した段階での期待以上の、今後の研究にむけた大きな足がかりでる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

葛西弘隆「領土の占有から社会の共有へ――尹慧瑛『暴力と和解のあいだ――北アイルランド紛争を生きる人びと』を手がかりに』、『クアドランテ』第 10 号、東京外国語大学海外事情研究所、2008 年、561-570 頁、査読無。

葛西弘隆「ラディカル・デモクラシーと『政治』の複数性」、『情況』2007 年 5・6 月号、159-164 頁、査読無。

〔学会発表〕（計 5 件）

Hirotaka Kasai, “On Hanamori Yasuji and ‘Kurashi no techo,’ Nordic Association for the Contemporary Japanese Studies, Annual meeting in University of Turku, Finland, March 20, 2009.

Hirotaka Kasai, Discussant on the panel, “Migrating Sciences and Technologies of Power in Imperial Japan,” Association for Asian Studies, Annual Meeting in Atlanta, USA, April 6, 2008.

Hirotaka Kasai, “Democracy and Knowledge: Masakazu Nakai’s ‘Logic of Committee,’” Nordic Association for the Contemporary Japanese Studies, Annual meeting in the Swedish institute of International Affairs, Sweden, March 27, 2008.

葛西弘隆「グローバル化のなかの日本社会と文化――現代社会を歴史化するために」（講演）、Jagiellonian University, Poland、2007年1月17日。

葛西弘隆「グローバル化のなかの日本社会と文化――現代社会を歴史化するために」（講演）、Warsaw University, Poland、2007 年 1 月 16 日。

〔図書〕（計 4 件）
酒井直樹「西洋と残余の文明的差異における多義性」、伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う――現代移民研究の課題』葛西弘隆訳、有信堂、2007 年、173-199 頁。

シャンタル・ムフ『民主主義の逆説』葛西弘隆訳、以文社、2006 年、全 225 頁。［含：葛西弘隆「解題――ラディカル・デモクラシー論の現在」、213-222 頁］。

J. ヴィクター・コシュマン「主体性と動員」葛西弘隆訳、ひろたまさき、キャロル・グラック監修、西川祐子編『戦後という地政学』（東京大学出版会、2006 年）、43-68 頁。

葛西弘隆「丸山眞男『現代政治の思想と行動』」、岩崎稔、上野千鶴子、成田龍一編『戦後思想の名著 50』(平凡社　2006 年)、141-150 頁。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
葛西弘隆（KASAI HIROTAKA）
津田塾大学・学芸学部・国際関係学科・准教授
研究者番号：70328037

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：